

特 71

963

日
本
歷
史

非
賣
品

301506-001-9

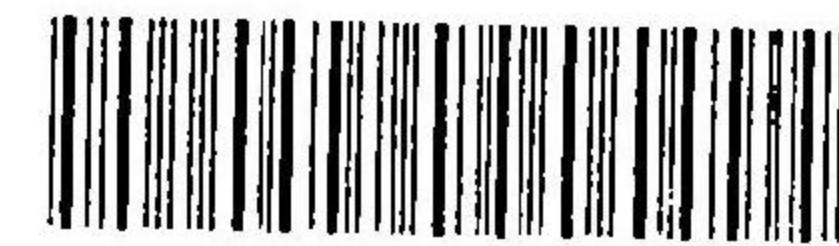
特71-963

日本歴史

倉賀野胤正 / 編

M25.6

ACB-0001



特71
963

日本歴史

第一篇 郷土ノ部

第一 姫路城ノ米歴



貞和三年赤松圓心ノ
レ本城ノ權輿ナリ其後
正年中羽柴秀吉掃磨ヲ
リ移リ往ク慶長年中池田
シ城外市廓ヲ立テ居ル

子赤松貞範始メテ今ノ城山ナル姫山ニ城ヲ築ク是
ノ諸氏茲ニ居住シ黒田孝高二至ル天
領シ大ニ當城ヲ増修シ三重ノ天守ヲ築キ三木城ヨ
リ輝政城主トナリ五重ノ天守ヲ建設シ内廓ヲ廣ク
三世其後本多松平榊原ノ數氏之ヲ領セシカ寛延
二年酒井忠知上州鹿橋ヨリ當城ニ移リ子孫住居スル一十世ナリ明治維新
ノ後陸軍省ノ所轄ニ歸シ今ハ大坂鎮臺歩兵第八旅團第十聯隊ノ兵營ヲ置
ケリ

第二 射楯兵主神社ノ米歴

射楯兵主神社ハ式内ノ社ナリ明治維新ノ初メ縣社ニ列ス東殿ニ五十猛神
西殿ニ大己貴神ヲ祭ル又九州御靈ト云フ神アリ西殿ニ配祀ス是ハ式外ナ
リ欽明天皇廿五年六月ノ勸請(但レ射楯神ハ初メ草上ノ郷ニアリレテ遷座合祀セルナリ)ニシテ初ハ水尾山
(今ノ秩父山ナリ)ニアリ後ニ椰本(今ノ内京口門ノ廣地ナリ)ニ遷シ遂ニ今ノ地ニ遷ス又境内ニ
播磨十六郡ノ百八十三神ヲ併セ祀リ惣社ニイフ祭日ハ毎年七月十一日十
一月十五日ナリ又臨時祭丁卯祭アリ臨時祭ハ二十年毎ニ行フ三ヶノ山ヲ
作り山上ニ神靈ヲ奉シテ能樂競馬ヲ神覽ニ供ス丁卯祭ハ六十年毎ニ行フ
一ヶノ山ヲ作ル能樂騎射等アリ此ニ祭ハ無比ノ大祭ニシテ往古ヨリ行ヒ
来リ世人ノ能ク知ル所ナリ

第三 姫路神社 来歴

姫路神社ハ建正親主命即チ舊姫路藩主酒井氏ノ祖先ナル雅樂助源正親朝
臣ヲ祭ル明治十四年十一月鎮祭アリ全十七年三月縣社ニ列セラル

第四 藥師山 紀念碑ノ来歴

明治十年春鹿兒島ノ賊徒亂ヲ作シ熊本城ヲ圍ム鎮臺司令官谷干城能ク拒
キ守ル朝廷大ニ陸海軍ノ兵ヲ發シテ之ヲ征ス第十師管兵亦出師ノ命ヲ受
ケ九州ニ赴キ各地ニ轉戦シ死スルモノ七百六十餘人ナリ明治十二年六月
城西藥師山ニ紀念碑ヲ建設シ毎年五月招魂祭ヲ行ヒ以テ其忠魂ヲ慰ムト
云フ

第五 船場本徳寺ノ来歴

船場本徳寺ハ真宗大谷派本願寺別格別院ニシテ慧燈大師(蓮如上人ナリ)ノ開基
ナリ明應年間飾西郡英賀ノ地ニ創立シ一時衰頽ニ赴キ居リシカ元和三年
船場地内町ニ再建シ現今ニ至ル本尊阿彌陀如来、親鸞上人ノ画像、七高僧
聖徳太子ノ御影ヲ安置ス

第六 河合道臣ノ傳

河合道臣ハ姫路藩ノ太夫ニシテ白水又ハ寸翁ト号ス文武兩道ニ達シ兼テ
書画ヲ善クセリ性謙遜ニシテ好ミテ士ニ下リ殊ニ教育ノ道ニ熱心ナリ仁
壽山ニ學校ヲ設ケ藩ノ子弟ヲ教育セリ頼山陽ノ如キ屢々道臣ヲ訪ヒ交道
尤モ親シカリシト云フ道臣藩候四君ニ歷事シ勤務三十餘年藩政ヲ改革シ
産業ヲ勸メ教育ヲ勵マシ其功業大ニ見ルヘキモノアリ殊ニ其經濟ノ術ニ
精シキハ當時ニ稀ナル所ナリ天保十二年六月病ンテ卒ス時ニ年七十五ナ
リ

第七 河合宗元ノ傳

河合惣兵衛宗元ハ姫路ノ藩士ニシテ幼ヨリ書ヲ讀ムコトヲ好ミ和漢ノ書
ニ通シ又武藝ニ熟達セリ夙ニ王室ノ衰微ヲ嘆キ國威ノ振ハサルヲ憂ヒ尊
王ノ大義ヲ唱ヘ志士ヲ鼓舞セリ惣兵衛同志ヲ卒ヒテ京師ニ赴キ諸藩ノ名
士ニ通シ東西ニ奔走シ攘夷ノ說ヲ唱ヘ王事ニ盡カス然ルニ幕府ノ忌諱ニ

觸レ姫路藩ニ禁錮セラル元治元年十二月惣兵衛以下五人ニ死ヲ賜フ時ニ
年四十九後四年ヲ經テ政權再ヒ王室ニ歸ス明治五年惣社境内ニ招魂社ヲ
建テ惣兵衛以下殉難ノ諸氏ヲ祀レリ全廿四年皇后陛下當縣御駐紮ノ際惣
兵衛ノ國難ニ死シタルヲ憫シ遺族ニ金五百圓ヲ下賜セラル全年十二月從
四位ヲ贈ラル當時有志ノ寄附金ヲ募リ紀念碑建設ノ計畫アリ

第八 兵庫縣尋常中學校沿革概略

明治十一年六月飾東飾西神東神西加西印南六郡聯合會ヲ開キ中學校設立
ヲ議定シ姫路景福寺ノ坊舎ヲ借リテ開校ス全十六年六郡町村費ヲ以テ校
舎ヲ國府寺町十三番地ニ新築シ同九月開校ス全十八年六月文部省中學校
教則綱領ニヨリ維持ノ目的立タサルヲ以テ閉校ス此間校長伊村則久在職
最ヲ久シク盡力勤カラス全十九年一月播磨十四郡聯合町村立姫路中學校
ヲ開設シ全二十年三月ニ至リ閉校ス全四月兵庫縣立尋常中學校ヲ創立シ

現今ニ至ルト云フ

第九 姫路高等小學校ノ沿革概略

姫路高等小學校ハ飾東郡聯合町村會ノ議決ニヨリ明治廿年四月城東尋常小學校々舎ノ一部分ヲ借り受ケ開校飾東郡長ノ管理ニ屬ス翌廿一年四月生徒大ニ増加セシヲ以テ五軒邸櫻谷寺ヲ借受ケ分教場トナセリ全六月下寺町裏卅八番屋敷ヲ借り裁縫場トナシ又其南隣ニ体操場ヲ設ク明治廿二年八月姫路市長ノ管理ニ屬セリ全廿五年四月生徒大ニ増加セシヲ以テ下寺町裏ノ共義社ヲ借り分教場ヲ造レリ當校ハ到底校舎ヲ新築セサルベカラサルヲ以テ數々其計畫アリト雖モ時機未タ會セス新築ノ功ヲ奏スルニ至ラス

第十 城南校常小學校沿革概略

城南學校ハ明治九年八月福中町ニ一大校舎ヲ新築シ全十三年三月南方ニ

一棟ヲ増築シ全十六年九月又其南方ニ一棟ヲ増築シタリ全廿年四月尋常小學校トナリ現今ニ至ル

第十一 城東尋常小學校沿革概略

城東學校ノ設立ハ明治十年十月ニシテ其以前數校ニ分レタリシカ飾磨縣ノ兵庫縣ニ合併スルヤ飾磨縣師範學校廢セラレシヲ以テ其校舎(今ノ尋常中學校ノ敷地ニアリモノ)ノ拂下ヲ請ヒ數校ヲ併セ當校ヲ設立セリ當校現時ノ校舎ハ明治十二年九月ニ新築セシモノニシテ最初ハ分校ト稱セシカ後ニ増築シテ本校トナシ舊校舎ハ頽廢セシヲ以テ賣却セリ全廿年四月尋常小學校トナリ現今ニ至ル

第二篇 日本ノ部

第一 天祖ノ勅及ヒ神武天皇ノ創業

昔天祖天照大神、天孫瓊々杵尊ニ、キノミコトニ三種ノ神器（八坂瓊勾玉、天叢雲劍、八咫鏡）ヲ授ケ勅シテ宜ハク豊葦原ノ瑞穂ノ國ハ吾子孫ノ世々君タルヘキノ地ナリ汝就キテ之ヲ治メヨ御位ノ盛ナルコト天地ト共ニ窮リナカルベシト天孫乃チ群神ヲ卒井テ日向ノ高千穂宮ニ降りタマヘリ曾孫神武天皇ニ至リ日向ヲ發シ大和ニ入り諸賊ヲ平ケ橿原宮ニテ皇位ニ即キ賜フ是レ我國ノ紀元元年ニシテ實ニ百二十二代二千五百五十二年間天胤相繼キ皇統連綿トシテ今日ニ至ル國体ノ尊嚴ナル世界万国ニ冠絶セリ

第二 熊襲及ヒ東夷ノ征伐

神武天皇ノ後數代ノ間ハ海内無事ナリシカ景行天皇ノ時ニ至リ筑紫ノ熊襲反ス天皇親征シテ之ヲ平ケタマヒシガ其翌年又反ス皇子日本武尊ヲシ

テ征伐セシム其後東夷多ク叛ク天皇又日本武尊ヲシテ之ヲ討タシメタマフ
尊駿河ノ賊ヲ平ケ相摸ヨリ海ニ航シテ上總ヨリ陸奥ニ入り悉ク東夷ヲ
平ケタマヘリ

第三 神功皇后ノ三尊征伐

仲哀天皇ノ時熊襲叛セリ天皇皇后ト共ニ之ヲ征ス天皇軍中ニ崩シタマフ
皇后兵ヲ遣シテ熊襲ヲ討タシメ旬日ニシテ服ス乃チ意ヲ決シ親ラ船艦ヲ
率井テ新羅ヲ征シタマフ國王懼レテ迎ヘ降り高麗百濟亦服從セリ皇后ハ
即チ神功皇后ナリ

第四 文學ノ渡来

應神天皇ノキ百濟ノ博士王仁トイフモノ来リテ論語及ヒ千字文ヲ献ス皇
太子稚郎子、王仁ヲ師トシテ學ヒ大ニ文學ニ通シタマフ是ニ於テ朝野之
ヲ傳ヘ文學漸ク國中ニ行ハル、ニ至レリ

第五 仁德天皇ノ聖德

仁德天皇ハ應神天皇ノ御子ナリ天皇攝津ノ難波ニ都シタマフ天皇勤儉政
ヲハガミ人民ノ貧困ヲアハレミ三年間課役ヲ免シタマヘリ天皇一日高臺
ニ登リ炊煙ノ盛ニ起ルヲ見テ民ノ富メルハ朕カ富メルナリト宜ヒ大ニ喜
ヒタマヒシト云フ

第六 佛法ノ渡来

欽明天皇ノ時百濟王佛像及ヒ經論ヲ献ス大臣蘇我稻目之ヲ禮セント云ヒ
大連物部尾皇等蕃神ヲ拜スヘカラスト諫ム是ニ於テ天皇佛像ヲ稻目ニ賜
フ稻目己ノ家ヲ捨テ、寺トナシ佛法ヲ信奉ス其後麿戸皇子ノ如キ深キ佛
法ヲ信シタマヒ遂ニ廣ク海内ニ行ハル、ニ至レリ

第七 蘇我氏ノ驕逆

皇極天皇ノ時蘇我蝦夷及其子入鹿驕逆ヲ恣ニシ非望ヲ抱ク中ノ大兄皇子

中臣鎌足等ト謀リテ入鹿ヲ朝廷ニ誅シタマヒ蘇我氏滅亡セリ

第八 大化ノ新政

孝徳天皇ノ時始メテ年号ヲ立テ、大化ト云フ中大光皇子ヲ立テ、皇太子ト爲シ古來封建ノ制ヲ改メ郡縣トナシ大ニ政治ヲ改革シタマフ之ヲ大化ノ新政ト謂フ中ノ大兄皇子ハ即チ天智天皇ナリ

第九 壬申ノ亂

天智天皇崩シタマヒ其御子大友皇子位ニ即キタマヒシカ皇叔大海人皇子兵ヲ起ケタマフ大友皇子之ト戦ヒ軍敗レテ瀕レ死シ大海人皇子位ニ即キタマフ是ヲ壬申ノ亂ト謂フ大海人皇子ハ即チ天武天皇ナリ

第十 奈良ノ朝

文武天皇崩シテ元明天皇立チ都ヲ大和ノ奈良ニ遷シタマフ元明天皇ヨリ光仁天皇ニ至ルマテ七代ヲ稱シテ奈良ノ朝ト云フ此時文學興起シ佛法隆

盛ヲ極メ殊ニ聖武天皇ノ如キハ深ク之ヲ信シ東大寺ノ大佛其他多クノ佛像ヲ造リタマヘリ

第十一 和氣清麿ノ忠節

孝謙天皇僧道鏡ヲ寵シタマフ道鏡竊ニ天位ヲ覬ハントス大宰主神道鏡ニ媚ヒ宇佐ハ幡ノ神教ト稱リ道鏡ヲシテ位ニ即カシメハ天下太平ナラント云フ帝之ヲ惑ヒ和氣清麿ヲ使トシ更ニ神教ヲ受ケシム清麿還リ神旨ヲ奏シテ曰ク我國開闢以來君臣ノ分定レリ天日嗣ハ必ズ皇緒ヲ立ツベシ無道ノ人ハ早ク之ヲ除クベシト道鏡大ニ怒リ清麿ヲ大隅ニ流ス天皇崩シテ光仁天皇立チ乃チ道鏡ヲ逐ヒ清麿ヲ召シ還シタマフ實ニ清麿ノ如キハ古今ニ並ヒナキ忠臣ト謂フベシ

第十二 延暦ノ遷都

桓武天皇ノ延暦十三年即チ紀元一千四百五十四年ニ都ヲ山城ニ遷サル今

ノ京都是ナリ

第十三 菅原道真ノ貶謫

宇多天皇藤原氏ノ權ヲ收メ皇室ノ勢ヲ張ラント欲ス菅原道真ヲ登用シテ政ヲ司ラシム天皇位ヲ皇太子醍醐天皇ニ讓リタマヒ藤原時平及ヒ道真ニ詔シテ天皇ヲ輔佐セシム時平等道真ヲ嫉ミ天皇ニ讒奏シ大宰權師ニ貶セリ後世天滿宮ト稱シテ朝野之ヲ祀レリ

第十四 延喜天曆ノ政治

醍醐天皇人ト爲リ聰明ニシテ寬仁ナリ深ク心ヲ政治ニ留メタマフ嘗テ雪夜寒甚シキニ會ヒ御衣ヲ脱シテ身寒風ヲ受ケ以テ貧民ノ苦ヲ察シタマフ人民其德ヲ稱シ仁徳天皇ニ比ス之ヲ延喜ノ政治トイフ天皇崩シテ朱雀帝立テ位ヲ村上天皇ニ傳フ天曆ト改元ス天皇亦明敏ニシテ政事ヲ勵ミタマフ之ヲ天歷ノ政治ト稱ス

第十五 天慶ノ亂

朱雀天皇ノ天慶二年平將門叛シテ下總葦島郡ニ據ル平貞盛等討テ之ヲ平グ之ヲ天慶ノ亂ト謂フ以後藤原氏益權勢ヲ恣ニシ道長ノ如キハ最モ尊横ヲ極メ國勢漸ク衰頽ニ赴ケリ

第十六 前九年ノ戰

後冷泉天皇ノ時安倍頼時反ス朝廷源頼義ヲ陸奥守トシテ之ヲ討セシム頼時死シ其子貞任勢盛ナリ頼義出羽ノ酋清原武則ト兵ヲ合シ進ンテ之ヲ討チ貞任ヲ誅ス是ヲ前九年ノ戰トイフ

第十七 後三條天皇ノ英明

後三條天皇天資英邁ニシテ即位ノ後記録所ヲ太政官中ニ置キ親ラ政ヲ聽キ節儉ヲ行ヒ天下ノ弊政ヲ改メ藤原氏ノ權ヲ抑ヘタマヒシカ在位僅ニ四年ニシテ崩御アラセラレシハ忠誠ノ士カ長ク冀惜セシ所ナリ

第十八 後三年ノ戰

堀川天皇ノ時清原武衡亂ヲ出羽ニ作ス源義家弟義光ト伐テ之ヲ平ク世
ニ之ヲ後三年ノ戰ト謂フ

第十九 保元ノ亂

後白河天皇ノ時崇徳上皇重祚ノ御志アリ兵ヲ擧ケタマフ源爲義其子爲朝
等召ニ應シテ白河殿ヲ守ル天皇源義朝平清盛等ヲシテ白河殿ヲ攻メシム
上皇ノ軍敗レ讃岐ニ遷サル之ヲ保元ノ亂ト謂フ

第二十 平治ノ亂

二條天皇ノ御時藤原信賴源義朝叛シテ大内ニ據ル天皇平清盛ヲシテ之ヲ
討セシム義朝戰敗レ信賴ハ斬ラレ義朝ハ逃レテ尾張ニ至リ長田忠致ノ爲
ニ殺サル之ヲ平治ノ亂ト謂フ

第二十一 平清盛ノ專横

平清盛平治ノ亂ニ源義朝ヲ討シテ功アリ藤原氏ニ代リ政柄ヲ握リ專横ヲ
極ム其子重盛數々之ヲ切諫ス清盛ノ兇暴少シク止ム重盛薨ス清盛憚ル所
ナク跋扈益甚シ

第二十二 源義政以仁王ヲ奉シテ兵ヲ起ス

安徳天皇ノ時源義政以仁王ヲ奉シテ平氏ヲ滅サント欲シ令ヲ諸國ノ源氏
ニ傳ヘ兵ヲ起サシム義政戰死ス然レモ是ヨリ源賴朝源義仲等兵ヲ擧ケ平
氏遂ニ亡フルニ至レリ

第二十三 源範賴義經東上シテ源義仲ヲ亡ス

源義仲信濃ニ起リ進ンテ比叡山ニ據ル平宗盛天皇ヲ奉シテ九州ニ走ル義
仲京都ニ在リ兇暴甚シ法皇之ヲ厭ヒ源賴朝ヲ召サル賴朝其弟範賴義經ヲ
シテ兵ヲ率井テ東上セシム義經ハ宇治ニ範賴ハ瀬田ニ向ヒ大ニ義仲ヲ敗
リ之ヲ殺ス

第廿四 一ノ谷戰

平氏源義仲ノ死スルヲ聞キ安徳天皇ヲ奉シテ東上シ攝津ノ一ノ谷ニ據ル
勢頗ル盛ナリ範頼義經兵ヲ率井テ一ノ谷ヲ攻ム範頼ハ東門ニ土肥實平ハ
西門ニ向フ義經鴨越ノ險ヲ越エテ城後ヲ襲フ平氏大ニ敗レテ讚岐ニ走ル
第廿五 檀ノ浦ノ戰
源義經兵ヲ率井テ讚岐ヲ攻ム平軍逃レテ長門ノ檀浦ニ泊ス義經進ンテ之
ヲ討ツ平軍利アラズ清盛ノ妻二位尼天皇ヲ抱キ海ニ投ス宗盛捕ヘラレテ
誅ニ伏ス平氏終ニ滅フ

第廿六 源頼朝征夷大將軍トナル

源頼朝奏シテ諸國ニ守護莊園ニ地頭ヲ置カン一ヲ請ヒ六十六國總追捕使
トナリ尋テ征夷大將軍ニ拜ス是ニ於テ兵權鎌倉ニ歸シ武門政治ノ世トナ
リ王室次第衰微ニ赴ケリ

第廿七 北條氏ノ執權

頼朝薨シテ子頼家其後ヲ嗣ク頼朝ノ妻政子其父北條時政ト謀リ之ヲ廢シ
其弟實朝ヲ立テ、征夷大將軍トナス實朝頼家ノ子僧公曉ノ爲メニ殺サレ
源氏ノ統絶ニ此後北條氏藤原氏ノ子弟或ハ皇子ヲ請ヒ將軍ト爲シ幼主ヲ
挾ミ將軍家ノ執權職トナリ獨リ權勢ヲ專ニス

第廿八 承久ノ亂

後鳥羽上皇北條氏ノ專横ヲ憤リ兵ヲ擧ケタマフ北條義時其子泰時ヲシテ
大軍ヲ率井テ西上セシメ京都ヲ攻ム官軍敗レテ後鳥羽上御門順徳ノ三上
皇速國ニ流サル之ヲ承久ノ亂ト謂フ

第廿九 北條泰時時頼ノ政治

義時ノ子職ヲ襲ニ及ヒ貞永式目五十一條ヲ撰定ス其政ヲ行フニ私ナク租
稅ヲ薄クシ節儉ヲ行ヒ奢侈ヲ戒メ百姓ヲ恤ム是ヲ以テ天下大ニ治レリ其

孫執權職トナルヤ一ニ泰時ノ式目ニ遵ヒ意ヲ政事ニ止メ微服シテ諸州ヲ
巡リ民ノ疾苦ヲ訪ヒ風化大ニ行ハル後世泰時ト並ヒ稱セリ

第三十 弘安ノ役

龜山天皇ノ文永五年元主忽必烈使ヲ我國ニ遣シテ和親ヲ求ム鎌倉ノ執權
北條時宗其書辭無禮ナルヲ以テ之ヲ退ク後宇多天皇ノ弘安四年元主忽必
烈其臣范文虎等ヲシテ大兵ヲ率井テ我國ヲ侵サシム先ツ壹岐對馬ヲ攻メ
更ニ筑前ニ逼リ大宰府ヲ侵ス我兵防戰甚タカム元兵退キテ鷹島ヲ保ツセ
月晦夜暴風大ニ起リ敵艦悉ク敗ル我兵勢ニ乘シ奮撃シテ之ヲ殲ス元兵十
万生キテ還ルモノ僅ニ三人ナリ是レヲ弘安ノ役ト謂フ

第卅一 後醍醐天皇北條氏ヲ滅シタマフ

後醍醐天皇兵ヲ擧ゲテ北條氏ヲ滅サントシタマフ鎌倉執權北條高時之ヲ
聞キ天皇ヲ笠置山ニ攻ム楠正成詔ヲ奉シテ赤坂ニ城ク笠置山陥リ正成亦

敗走シ天皇隱岐ニ流サル正成再ヒ金剛山ニ城キ皇子護良親王亦吉野ニ城
キ兵ヲ擧ゲタマフ賊兵金剛山ヲ攻ム正成數々奇計ヲ設ケテ賊兵ヲ敗ル時
ニ新田義貞兵ヲ上野ニ擧ケ鎌倉ヲ攻メ高時自殺シ北條氏亡フ天皇隱岐ヲ
出テ源忠顯等ヲシテ京師ヲ復セシム足利尊氏歸順シ金剛山ノ圍ミ解ク車
駕京師ニ還レリ

第三十二 楠正成ノ戰死

足利尊氏鎌倉ニ據リテ反シ大擧シテ京師ニ入ル天皇比叡山ニ幸シタマフ
會比畠顯家陸奥ノ兵ヲ率井テ来リ正成義貞ト共ニ攻メテ尊氏ヲ敗ル尊氏
九州ニ走ル後尊氏大兵ヲ率井テ東上ス新田義貞之ヲ兵庫ニ防ク天皇正成
ヲシテ性キテ義貞ヲ援ケシム正成義貞ヲ召シ還サント請フ用井ラレス正
成湊川ニ戰死ス其忠勇義烈古今ニ冠絶セリ

第卅三 南北朝ノ分立

尊氏豊仁親王ヲ立テ、天皇トス之ヲ光明天皇トイフ是ヲ北朝トス後醍醐
 天皇大和ノ吉野ニ幸シタマフ是ヲ南朝トス是ニ於テ南北朝ノ兩帝アリ五
 十七年間南北ノ戰常ニ絶エズ

第三十四 楠正行ノ戰死

楠正成ノ子正行義兵ヲ擧ク尊氏高師直ヲシテ之ヲ討タシム正行行宮ニ至
 リ後村上天皇ノ龍顔ヲ拜シ且ツ後醍醐天皇ノ廟ニ謁シ進ンテ四條ノナワ
 テニ戰ヒ弟正時ト相刺シテ死ス實ニ楠公父子ノ如キ古今無比ノ忠臣ト謂
 フベシ

第三十五 南北朝ノ合一

後龜山天皇足利義滿ノ請ヲ容レ京師ニ還リ父子ノ禮ヲ以テ神器ヲ北朝ノ
 後小松天皇ニ授ケタマヘリ是ニ於テ南北朝始メテ合一セリ

神武	孝靈	成務	元應	武烈	用明	齋明	元明	光仁	文德	朱雀
綏靖	孝元	仲哀	安康	繼體	崇峻	天智	元正	桓武	清和	村上
安寧	開化	應神	雄略	安閑	推古	弘文	聖武	平城	陽成	冷泉
懿德	崇神	仁德	清寧	宣化	舒明	天武	孝謙	嵯峨	光孝	圓融
孝昭	垂仁	履中	顯宗	欽明	皇極	持統	淳仁	淳和	宇多	花園
孝安	景行	反正	仁賢	敏達	孝德	文武	稱徳	仁明	醍醐	一條

謚号

三條	堀河	六條	仲添	後宇多	後村上	朝北	光嚴	後小松	正親町	靈元	後桃園
後一條	鳥羽	高倉	後堀河	伏見	後龜山	光明	稱光	後陽成	後陽成	東山	光格
後朱雀	崇徳	安徳	四條	後伏見		崇光	後花園	後水尾	後水尾	中御門	仁孝
後冷泉	近衛	後鳥羽	後嵯峨	後二條		後光嚴	後土御門	明正	明正	櫻町	孝明
後三條	後白河	土御門	後深草	花園		後圓融	後拍原	後光明	後光明	桃園	
白河	二條	順徳	龜山	後醍醐			後奈良	後西院	後西院	後櫻町	

明治二十五年六月二十七日印刷
 明治二十五年六月三十日出版

姫路市坊主町拾貳番邸
 發行兼編輯人 倉賀野胤正

同市北條口七拾四番邸
 全 兒島金七郎

同市中村六拾三番邸
 印刷人 中山次三郎

